

「京都の歴史を歩こう!—下鴨編—」の 事前調査

長谷川 昇平

2015年11月7日に行われた京都府立大学歴史学科・京都府立総合資料館主催、総合資料館寺子屋講座「京都の歴史を歩こう!—下鴨編—」では、「下鴨に住む人々の暮らし」をテーマに、下鴨地域に点在する近世から近代にかけての様々な遺構等を解説した。当日の詳細については、壁谷報告に譲り、本稿では当日までの歴史学科有志16人(3回生9人、2回生7人)が行った事前準備のうち、3回生が行った事前調査について述べる。

1. 事前調査開始以前

最初にメンバーがミーティングを行ったのは2015年5月11日である。ここでは、本番までのスケジュールを決めた。そして5月28日に行われた第3回ミーティングでは、解説する候補を複数挙げ、さらに集団での現地調査も行った。さらに6月8日のミーティングでは、5月28日のミーティングで挙げられた解説候補から、重点的に調査する項目を六斎念仏、植物園北遺跡、治水・鴨川、疏水、都市計画、地蔵盆、萩児童公園、中川原公園の8つに絞り、それぞれの担当者を決めた。また、下鴨神社の式年遷宮、祭事、団子、河合社、社家町、地名も調査することになり、これもそれぞれの担当者を決めた。以降、各自で担当分野を調査した。

2. 事前調査

事前調査は、6月8日のミーティング以降、10月ごろまで行った。遠足終了後、本稿を作成するにあたり、事前調査を行った3回生にどのような事前調査を行ったかのアンケートを実施し、私を含めた3回生7人の事前調査の実態が判明した。その結果を以下に述べる。

まず調査方法であるが、文献調査、実地調査、現地での聞き取り調査、博物館見学など多岐にわたっていた。文献調査では、7人全員が書籍や論文を用いており、都市計画や乙井川、疏水の担当者は現在の地図や古地図を用いていた。その際、京都府立総合資料館の担当職員の方への質問や、京都府立大学附属図書館の文献を使用することが多かった。実地調査も7人全員が行っていた。具体的には現状の確認や碑文の確認などであるが、現在も芸能や町内行事、祭事として続いている六斎念仏や地蔵盆、中川原公園の御蔭祭の事前調査では、実際に各行事が行われている日に現地に行き、それを調査するというものも行っていた。現地での聞き取り調査は地蔵盆の担当者のみが行っていたが、詳細は後述する。博物館見学は、疏水担当者が琵琶湖疏水の知識を得るため琵琶湖疏水記念館に訪れている。

ついで各自どのように事前調査を行ったかであるが、アンケートから2例挙げる。

地蔵盆の事前調査

下鴨の地蔵盆を調べるにあたって、まず総合資料館で関連する資料を調査した。長尾智子氏



写真1 萩児童公園の地藏盆の様子

子どもたちが地藏に手を合わせていた。その後は綱引きやスーパーボールすくいといったお楽しみ会をおこなっていたようだ。残念ながら、全てを見学することはできなかったが、参加していた大人から聞き取りをおこなうことができた。

聞き取りをした方や準備していた大人たちはあいにく、萩児童公園の地藏の詳しい由来や、いつから地藏盆をおこなっているのかは知らなかったようだ。しかし毎年地藏盆の役員を子ども会のなかで決めていることや、地区に住む高齢者の孫なら地区外に住んでいても参加できるなど、現在の地藏盆に関する詳しいお話を聞くことができた。地藏盆の準備をする大人たちは、自分が子どものときに楽しんだ地藏盆を、自分の子どもたちにも経験させたいという思いを持っているようだった。

聞き取りから、大人が地藏盆に対して抱いている思いについても気になったため、地藏盆についてのコメントがなされている雑誌なども確認した。そこから、地藏盆が子どもだけでなく大人にとっても親睦を深めるものであると分かった。下鴨に地藏が増えた経緯のなかで「自分たちの町で地藏盆をやりたいという理由でわざわざ寺から貰ってきた」ということがあったようで、今も昔も変わらない思いがあると感じた。

遠足ルートが決まって、中川原公園にも立ち寄ることになった。中川原公園にも地藏があったが、地藏盆の見学をすることができず、そもそも地藏盆をしているのかどうかも分からなかったため、公園付近の店で聞き取りをおこなった。聞き取りにより、中川原公園の地藏も地藏盆をおこなっていると分かったが、地藏の由来や地藏盆をいつから行っているかについては不明であった。別の場所にあった地藏を公園内に移動させたという話を聞くことができた。

その後、長尾智子氏の報告から、中川原公園の地藏は町内の有志で壬生寺から移動したものと分かり、また地藏の隣の石造物に「大正十五年」とあり、少なくとも大正15年には祀られていたと推測できた。

中川原公園の事前調査

中川原公園の調査は、まずいつから公園が存在し、それ以前その場所や周辺に何があったのかを調べることから始まった。その結果、参加者に興味を持ってもらうためには公園自体ではなく、その場所と関わりの深い御蔭祭がよいのではないかと判断した。もとは別の担当分として受け持っていた下鴨神社の祭事と中川原公園を組み合わせることにした。そして、人の暮らしと御蔭祭・公園の3つを関わらせることを意識しつつ、方針を転換して再調査を始めた。

の下鴨の地藏盆についての報告がかなり参考になったが、京都の他地域の地藏盆報告書も確認した。また、今回説明する萩児童公園の地藏も碑文などの有無をチェックした。長尾智子氏の報告書から、萩児童公園の地藏は地中から掘り出されたものだと判明した。

萩児童公園でいつ地藏盆をするか、掲示などがなく不明であったので、一般的な地藏盆の日程である8月25日に行くと、ちょうど地藏盆がおこなわれていた。僧侶の読経後、

再調査にあたっては、御蔭祭と下鴨村の暮らしの両方から調査を進めた。御蔭祭を調べる際には、より正確な情報を得るため下鴨神社監修の書籍を利用し、不明な点については直接確認をした。また御蔭社へも実際に足を運んでみた。御影山は祭事を行う日とは異なり、人もなく社がひっそり佇むだけであったが、偶然帰途に下鴨神社の神饌田を見つけた。

下鴨村の暮らしの調査には京都府立総合資料館蔵の「町村沿革取調書」(京都府庁文書)や『史料京都の歴史』、『親と子の下鴨風土記』を利用しつつ、近世から近代までの下鴨村の暮らしと下鴨神社の祭りの関係を調査した。この調査においても、現状が不明なものや細かい部分については直接確認を取った。

もともと中川原公園は、休憩に最適であるために定点解説の候補に上がった地点であった。さらに祭事は伝統を守るため変化も少なく、歴史や文化に興味を抱いているであろう参加者には既知の情報も多い。そこで、今回の調査全体を通し、歴史学科の学生だからこそできるガイドとは何かということを考え続けた。また、自分個人の研究ではなく参加者に楽しんでもらうことが目的であるため、相手がいることを強く意識した。そのため、調査してまとめる際には、道中の話に変更したのもも幾つかあったが、内容にまとまりを持たせることができた。

3. 「京都の歴史を歩こう!—下鴨編—」の事前調査における反省点

上記の通り、「京都の歴史を歩こう!—下鴨編—」のための事前調査を進めた。しかし、そのなかで2点の反省点が見つかった。

1点目は、今回の事前調査では1次史料(古文書や行政文書)をあまり利用しなかったため、解説や学生有志の理解が先行研究の域を出ないものになってしまったことである。過去のデザイン研修の事前学習を見てみると、2013年に行われた「京都の歴史を歩こう!松ヶ崎探検ウォーク」の事前学習では、京都市歴史資料館に写真版がある「松ヶ崎立正会文書」の一部を翻刻している。また、今回の遠足で取り上げた報告に都市区画整理事業があるが、その事前調査では1次史料を用いていなかったが、京都府立総合資料館の歴史遠足担当の方に、かつての歴史遠足で都市区画整理事業を担当した学生は、行政文書を多く用いていたと指摘された。

2点目は、今回の事前調査では地域の歴史に詳しい方への聞き取り調査を行わなかったことである。過去のデザイン研修の事前学習を見てみると、2013年の「松ヶ崎探検ウォーク」の事前学習では、松ヶ崎に詳しい岩崎皓氏に、2015年に行われた「京都の歴史を歩こう!—上賀茂編—」の事前学習では、「上賀茂ジュニア検定」作成に関わった藤井豊一郎氏に聞き取り調査を行っている。一方、先述の通り、地蔵盆の事前調査で聞き取り調査を行ったが、その対象は地蔵盆に参加している大人であった。今回は担当者が現在の地蔵盆に対して人々がどう関わりをもっているのかというテーマに変更したが、聞き取りから地蔵盆の由来や起源が不明だったことを考えると、やはり地域の歴史に詳しい方への聞き取り調査は必要であろう。

これらの反省点をもとに、来年以降の歴史遠足がより良いものになっていくことを期待したい。